

第5回沖繩宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 発題 「なぜ共通の祈祷課題にならないのか？」

外間 永二

『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして彼らは目で見ることなく耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。私は彼らを癒さない。』
マタイ 13章 14節

素晴らしい言葉（神学）のやりとりだけでは意味がない!

富坂キリスト教センターに限らず日本の教会と議論してきたことは、日本基督教団と沖繩キリスト教団の「合同の捉え直し」と「名称変更」議案が教団総会において廃案となった問題をどう受け止めているのか？ということです。この問題を深く掘り下げていけば、教団が抱えている問題の質がはっきり浮かび上がってくると思います。教団総会で決議された「合同のとらえ直し」に関連する「6議案」と両特設委員会が20年も議論して合意した「6項目合意事項」がありましたが、“真夏の夜の夢”と消え去りました。この6議案と合意事項には双方共に検証すべき教会のあり方と質の問題が示されているのですが、教団総会議長の山北牧師（当時）は第33回教団総会で「審議未了！ 否決！ 廃案！」と宣言したのです。

なぜそれを打ち切り廃案とするのか？ 教会と教会が「合同」ということは、一方の教会がもう一方の教会に従属するものではなく、歴史的体験と文化の質が違う教会が、それぞれの課題を背負って出会い、お互いに新しく変えられ、新たな合同教会としての可能性を実現していくことにあったはずです。私は前回の富坂との合同研修会で①「意味のない立派な神学のおしゃべりなど聞きたくない」②「素晴らしい神学による問題提起がなされ素晴らしい神学による夢が語られましたが、それが何一つとして実現したことがない」と訴えました。（富坂キリスト教センター紀要第10号参照）わざわざ時間を作ってまで教養講座などやりたくないのです。日本の教会に問題を訴えても「沈黙」し「無視」するだけで、沖繩から問われていることに真摯に答える教会としての実体がないのです。中には怒り出す牧師や信徒もいます。

かつてアメリカでは奴隷制度を肯定し教会が存在していたと言われていますが、日本基督教団は植民地主義の枠の中に教会が存在し、植民地主義神学によって教会が成立していると言えるのではないかと思います。それから沖縄の教会の問題として、第二世代懇談会でも議論されている同化主義体質の問題が根底にあります。皇民化教育によって作られた意識として「日本人になりたかった！」と、第二世代は自らの意識下にある同化体質の問題を語っています。しかし、内面化している体質を相互に検証し剥ぎ取ることはしなかったとその体質を温存したまま沖縄の教会形成を進めてきたと言っています。更にこの問題を議論することを自分たちは“避けてきた”と言っています。同化主義体質を克服することのできない信仰をもってする宣教というのはどのような教会を形成することになるのか？合同を境にして著しく教勢が低下してきているのはそのことと無関係ではないと思います。

ようやく語ることができたこの同化体質の問題を、今後第3世代として引き継ぎ、実証的に解明していく必要があります。第三世代もこの同化体質の問題を議論し、未だに統一見解を出すに至ってないのです。私は第二世代と同じように避けているのではないかと思うところがあります。それから日本の教会の問題として明らかに日本（人）を上位に置いて同化を強いる問題があり、それは同時に「異質」なものを「排除」する「差別体質」が克服されることなくあり続けています。日本人牧師の沖縄買春問題（『福音と世界』2003年5月号参照）日本におけるヘイトスピーチ問題がそのことを物語っています。たえず外に敵を作って異質なものを排除し自分（達）を守ろうとするあり方が繰り返され、そうである以上今後ますます「戦責告白」は意味を持たなくなっていくことでしょう。すでに意味を失っているという人もいます。教団は戦争に協力したのです。また米軍が沖縄に上陸する前に、沖縄在住の日本人牧師は全員沖縄から立ち去っています。その結果、沖縄の教会は壊滅状態になりましたが、戦後信徒の祈りと讃美によって0から出発しています。戦争に協力した日本の教会は教会としてなぜそれを明らかにし徹底的に検証することをしないのか？ここに当事者として責任意識の希薄な教団の体質を自覚し、改めなければならないということから「合同のとらえ直し」として提起されたはずです。ですから問題を曖昧にする体質を抉り「変革」することを目指していたのではなかったか？それを廃案にするとなると合同教会として関係は成り立ちません。今日本社会は色んな領域で崩壊し内部矛盾が深く進行していると感じます。その現象として、最近は大人社会にまでイジメ問題や、親の我

が子に対する虐待死兄弟殺し、親子殺しなどゾッとする問題報道が増え続けているのは、そのことと無関係ではないと思います。沖縄に関して言えば、あれほどの地獄の戦争体験をしたにも関わらず何故またしても復帰を選び取ったのか？しかも日本を祖国と言い変えてまで復帰を渴望し実現しています。また戦後も「方言札」を使って日本語教育を徹底し、それを沖縄教職員会は自分たちから進んでやっています。この戦後の沖縄教職委員会主導による祖国復帰運動は日本政府によって表彰されるに価するものです。教会はどうだったかという、戦争に協力し神社参拝を強制した日本基督教団の神学校に若者たちを留学させ、牧師資格を取得させ、沖縄支教区を抹消した日本基督教団の教会を、沖縄の地に形成していくことを宣教基本方針として宣教しています。この問題も私は徹底的に抉っていく必要があると考えています。しかしこの点に第一世代と第二世代の決定的な歴史認識の違いを見ることができます。仲里朝章牧師は沖縄の教会とはどういう教会か？という問いに対し「沖縄人を根幹とした教会である」と言っています。そしてそれは世界に開かれた教会であると。また第二世代が積極的に主導し合同を推進していることに対し、翁長良起牧師は「若い人たちは合同だ合同だと言っているが、私たちが戦後一生懸命になって取り組んできたことは、何の意味もないものなのか！考え直してもらいたい！私は非常に不愉快です！」と発言していました。それから、最後の沖縄キリスト教団総会（合同決議総会）が那覇中央教会で行われたとき比嘉盛仁牧師は「名嘉君、名嘉君、君たちね！合同だ合同だと言っているが！合同したら日本中のカスが沖縄にやってくる！沖縄の良いものはみんな取られてしまうよ！君たちそのことが分かってないよ！大丈夫か？」と話していたのを私は聞いています。合同がもう後戻りできない状況下での発言でした。それから日本人牧師たちから「沖縄独立」について発題して欲しいということなのですが、他教派も含めて全国から沖縄に来る日本人牧師たちは沖縄の独立問題に強い関心を持っているようなのですが、それもよく分からないところなので、なぜ沖縄の独立に関心を持つのか？沖縄人に独立論を語らせる前に、なぜ！沖縄の独立志向に関心を持つのか？その内容を先に聞いてみたいのです。沖縄が日本に組み込まれていく歴史過程と現在の関係状況を見れば、沖縄が独立に舵を切る必然性は十分すぎるほどあるわけで、沖縄人は400年も日本人になろうと努力してきています。強いられた努力であったものが、いつの時代も新同化主義として立ち現れてきます。かつて琉球新報の社長だった沖縄人太田朝敷は講演会(1900年)で「クシャメまでも日本人のようにせよ！」と極端な同化主義的発言をしています。

それで沖縄人は日本人になれたのでしょうか？今後も日本に同化する努力をして、日本人ようだと言われるものを沢山身につけて日本人と共に歩んで欲しいと言える人がいますか？沖縄独立の研究活動をする学会もできました。現在のところ学会としての研究啓蒙活動ですが、独立を前提としての学会活動ですから、将来的には当然日本国からの離脱独立を主張していくでしょう。また沖縄教区の信徒たちも日本基督教団から離脱独立を志向する信徒が増えてきています。社会的には日本国から離れたたいという独立志向意識が強くなってきているし、合同の結果からして教会も日本基督教団との合同では沖縄の教会として独自の文化を生かした教会形成は出来ないと考えられる信徒が増えてきています。教会と教会の合同というのはこのような結果になるものではないはずだと、今更話し合うことなど必要ないと考えられる信徒が増えていきます。

歴史的には薩摩の琉球侵略の問題、そして薩摩の琉球支配の手法にならって、明治政府の「廃国置県」という琉球国処分の問題があり、更に世界中の地獄を集めたと言われる沖縄地上戦があり（天皇制を存続させるための時間稼ぎ）あげくの果ては沖縄をアメリカに売り渡すことで日本は独立するというサンフランシスコ講和条約（4・28）があり連動して安全保障問題があります。当然その安全保障対象の中に沖縄は入ってないわけで、その結果50年代頃から全国に点在していた米軍基地が沖縄に集中するようになりました。そのことに何の痛みも問題意識も持たない日本人による構造差別の問題があり、辺野古新基地建設の強行は日本人問題の象徴です。この「構造差別」という痛くもかゆくも感じさせない差別の仕組みというのは、実に見事な仕組みというほかありません。また「お金もらえるからいいでしょう！」という日本人もいます。そのような構造差別によって国家体制を成り立たせている日本人の一人であるという自覚と問題意識は教会といえどもなかなか出来ないようです。正に「醜い日本人」（太田昌秀）です。歴史的に見ていくと、沖縄の理不尽な不幸は日本によって植民地化されたことにあることは間違いのないことです。それは同時に日本の不幸でもあり貧しさでもあるわけですが、大多数の日本人にその自覚は感じられません。沖縄に問題を押しつけ、沖縄を犠牲にして日本の幸福平和と安全が成り立つのでしょうか？私たち沖縄人が求め続けているのは、この植民地支配を何としても終わらせること、そのためには沖縄の「自己決定権の確立」は必要欠くべからざる絶対条件です。そして日本人に望むことは、他者（特に沖縄、そして東アジア）の犠牲に上に日本人の生活があってはならないということを考えて頂きたい。ここに教会として克服すべ

き祈祷課題があると訴え続けて50年も経っています。無理なことでしょうか？この問題を取り扱うことができないのであれば、私にとって合同研修というのは意味がないし、これ以上あれやこれやということもありません。愛と救いの信仰を持つ教会として、教会変革の可能性を信じていた私は二十代の頃から語り訴えてきているし、語るべきことは語ってきました。更に語れと言われてもこのように同じことを繰り返し語ることにしかありません。これまで語ってきたことで十分だと思っています。

冒頭でも書きましたが、教養講座などやりたくないのも、この辺で区切りをつけたいと考えています。教団から離脱した他教派も同じ質の問題があると思います。離脱したから関係ないという問題ではないでしょう。沖宣研も沖縄内部に目を向けた活動に切り替えて欲しいと思います。やりたいことはいっぱいある！
以上